ISSN 0389-1984
東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒160)
TEL.(03)344-1701～3

トヨタ財団レポート
THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

Dec. 1983 No. 25

世界の23財団が国際助成について討議

昭和58年8月29日から9月1日にかけて，イギリスのディッチレイパークで世界の民間助成財団23財団の主脳が集まって，国際助成のあり方をめぐる会議を行った。

このような世界的規模での財団会議はあまり例がないとのことであるが，欧米以外の参加者は，ヴェネズエラのメンドーサ財団，サウジアラビアのファイサル財団と日本のトヨタ財団だけであった。トヨタ財団からは林雄二郎専務理事と国際部門プログラムオフィサーの岩本一恵の2名が出席し，これまでのトヨタ財団の国際助成活動の試行錯誤の過程を紹介した。詳しくはP2～3をご覧下さい。

第17回助成研究報告会を開催

12月10日(土)，11日(日)の両日，京都会館で「草の根と行政の間」と題して，市民レベルでのまちづくりを中心とした研究報告会を開催した。トヨタ財団の助成により進められてきた住民の発想を生かしたまちづくりに関する4件の研究報告と，関西各地におけるまちづくり活動グループの体験交流をねらいとしたものであり，自治体関係からも多数の出席者を得て活発な論議が展開された。詳しくは次号ニュースレターでご紹介の予定。

全国各地からの応募をお待ちしています
――第3回研究コンクール　只今公募中――

トヨタ財団は，この10月15日以来“身近な環境をみつめよう”のテーマで研究計画を公募しております。これは，それぞれの地域の生活の現場から発想した研究課題に，アマチュアもプロも一体となってとり組もうという，そういう活動を促進しようとして企画されたものです。

公募の締切は来年1月15日です。応募書類をお求めの方は官製ハガキで財団事務局の研究コンクール係にご請求下さい。詳細は電話でのお問い合せも結構です。

第2回研究コンクール中間研究報告会
身近な環境―この1年

11月27日(日)，28日(月)の両日，東京港区六本木の国際文化会館で，第2回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”の中間研究報告会が行われた。研究奨励賞を受けてこの1年間活動してきたチームのうち11チームが今回の報告会に参加した。

27日は，報告会に先立ち第2回コンクールの選考委員と，今秋公募を開始した第3回コンクールの選考委員との合同の選考委員会が開かれ，これまでの経過や今後の方針などについて議論が行われた。27日午後から28日にかけては，各チームの研究報告が行われ，選考委員との熱のこもった質疑討論が展開された。

今回の報告会には，代表研究者の他にそれぞれのチームの共同研究者の方々や，関心をお持ちの一般参加者など多数参加され，27日夜の懇親会でも相互の交流が活発に行われた。

写真上 選考委員会　写真下 研究報告会

ディッチレイパークにおける民間助成財団国際会議
国際助成の好機と落し穴

国際部門プログラム・オフィサー　岩本一恵

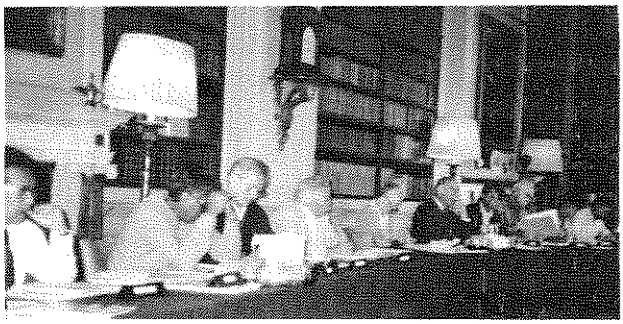
英国オックスフォードシアーにあるディッチレイパークの古城で，世界の民間助成財団23財団が集まって，国際助成にあたって助成財団間の協力の可能性を検討する会議が8月29日から9月1日まで開かれた。勿論，集まった財団は，日頃，国際助成の落し穴について嫌という程の思いを味わっている財団ばかりである。したがってここで討議されたことは残念ながら門外不出ではあるが，雰囲気だけでもご紹介をしたいと思う。

※財団版サミット

この会議の主催者はアメリカにある国際大学財団という事業財団で，専務理事はミルドレッド・セイジ女史である。この貫禄と魅力をかねそなえたセイジ女史の呼びかけで，一筋縄ではいかない世界の民間助成財団の実質的指導者（主としてプレジデントすなわち日本で言えば専務理事）が集まって3泊4日，街から遠く離れた牧場の真中でカンヅメになったわけである。

参加財団は，アメリカからフォード財団，ロックフェラー財団，カーネギー財団，ロックフェラー・ブラザーズ基金，アルトン・ジョウンズ財団，ロバート・ボッシュ財団，A.W.メロン財団，マッカーサー財団，米日財団，合衆国ジャーマン・マーシャル基金，エクソン教育財団，高等教育基金であり，ヨーロッパからは，フォルクスワーゲン財団，バーナード・ファン・リア財団，ウェルカム・トラスト，フリッツ・テュッセン財団，ナフィールド財団，ヨーロッパ文化財団，スウェーデン銀行三百周年財団であった。カナダからはドナー・カナディアン財団，ヴェネズエラからエウゲニオ・メンドーサ財団，サウジアラビアからファイサル国王財団，日本からトヨタ財団が参加した。

議論中の参加者



会議の主たる議題は　**1．国際助成における好機と落し穴，2．国際助成の評価，3．国際助成に当っての協力**，の3つであった。

※国際助成における好機と落し穴

第1の議題，国際助成における好機と落し穴については，議論を東西関係の場と南北関係の場に分け，東西関係の場では，東西紛争と核戦争の脅威をかかえた現状に対して何を助成の好機と見るか，落し穴はどこにあるか，について実例を挙げながらの討論が行われた。多くの財団が間違ったかかわり方をし易く，問題と状況の充分な検討もせずに流行の波に乗って「とにかく何かしましょう」症候群に罹患するとかえって有害な結果をもたらす，という意見がかなり多く出された。南北間における助成にも全く同様のことが言えるわけで，第3世界が何を欲し何を必要としているのかその声をよく聞くべきである，ということが強調された。そして，政府機関が第3世界に対してとるアプローチとは異なった独自のアプローチをとり，それを発展させるべきであることも強調された。

東西間や南北間のような特別難しい場における助成の他にも様々な国際助成があるわけだが，そのような場合に目的がいかに価値のあることでも国境を超えてある機関を作り上げるような試みは難しい問題に直面することが多い，ある社会で成功したモデルを他の社会にトランスファーすることは文化等の違いによってしばしば困難に直面する，国際的大プロジェクトから実際に意義のある成果が得られることは大変難しい，等の意見が出された。しかしそれにもかかわらず助成財団は助成ということについて多くのテクニックを使うことができるはずで，状況についての深い読みとそれらテクニックの組み合せを工夫することで困難を乗り切ることもまた可能である，という意見も強調された。

※国際助成の評価

第2の議題，国際助成の評価についても評価など全く時間の無駄であって不必要という少数意見をめぐって侃侃諤諤の議論が展開された。評価という言葉が意味することは3つある。助成決定をするための評価（事前アセスメント），助成中の評価（助成中に現地を訪ねてのモニタリング），助成後の評価であるが，事前評価は当然であり，助成中のフォローも当然である。問題は助成後

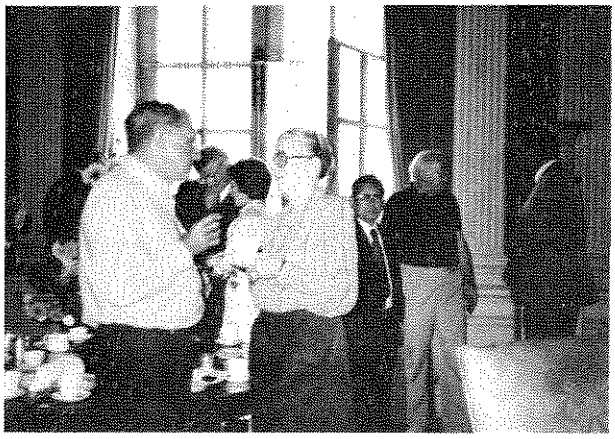
の評価であった。評価にはいろいろなやり方があり全てを数値化するような方式も行われてはいるが，会議の参加者にはそうした数値化方式よりも簡素でしかも自然に見えてくるような評価方式の方を良しとする意見が圧倒的であった。その極端な例が評価は不必要という意見だったわけで，つまり，助成対象者との信頼関係を基本に置くからである。一方，助成対象者は評価をされることに好意的な関心を持っていることも事実である。結局，大多数の意見がおちついた所は，助成対象者との間に信頼関係が無い場合はプロジェクトを止めた方がいい，事後評価は財団の長期プログラムの見直しという観点から是非とも必要である，自国での評価基準が他国に当てはまるとは限らないので細心の注意が必要である，というものだった。

※国際助成に当っての協力

第３の議題，国際助成に当っての協力については，財団間で共同助成を行う時には，申請者の側でも財団側でも時間がかかる，特に申請者は種々の財団の方針の違いに対応する面倒がある，各財団が持っているアイデンティティを失う，助成側の責任者がわからなくなる，等の短所もある。どうしても資金が不足している時や，複数の財団が応援しているということが象徴として必要な時には大変有効である。しかし共同助成の他にも財団間の協力には種々の形があって，情報交換，ある財団が助成したプロジェクトの次段階を他の財団が助成するといった間接的共同助成，小さな会議で焦点がはっきりしている会議に行う共同助成，共同で行う研究コンテスト，一つの財団では専門性が不足する時の共同，問題がセンシティブな時の共同，などは大変有益であるという意見が大多数の一致した意見であった。特にまず財団間の情報交換が必要でそこから得ることは大きいだろうという点が強調され，ここディッチレイに集まった財団でディッチレイ・クラブを作って緊密な情報交換をしてみてはという提案があった。

後日談ではあるが，当財団はこのディッチレイ・クラブ情報網で，国際協力の落し穴を避け得たことが既にあるというご報告をしておきたい。

談笑中の参加者。前方左よりフォード財団カーマイケル氏，国際大学財団ワズワース女史，林専務，ファンリア財団ウェリング氏



『隣プロ』の翻訳者二人が翻訳文化賞
野中耕一，吉川敬子の両氏

トヨタ財団の「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成では，東南アジアの本をもっと日本人に読んでもらうため，その翻訳費用を助成しています。

このほど，この『隣プロ』の助成対象である本の翻訳で，２人の翻訳者が日本翻訳家協会（高橋健二会長）の第20回日本翻訳文化賞を受賞されました。

ひとりは，アジア経済研究所統計部長の野中耕一氏で受賞対象はニミット・プーミターウォン著の「農村開発顚末記」（井村文化事業社刊）で，タイ語からの翻訳です。

もうひとりは，アジア・アフリカ語学院講師の吉川敬子氏で，ククリット・プラモート著「王朝四代記」（全５巻，井村文化事業社刊）が受賞対象です。これもタイ語からの翻訳です。

この受賞を機に，東南アジアの本に対する関心が一層高まればうれしいことです。

タイ日辞典の冨田教授にタイから名誉博士号

大阪外国語大学の冨田竹二郎教授に，去る９月22日，タイのシーナカリン・ウィロート大学から名誉博士号が，外国人学者としては初めて授与されました。これは冨田教授の長年のタイ日文化交流への功績が評価されたものです。冨田教授は，現在，語数40,000語に及ぶ本格的なタイ日辞典の編纂にとり組んでおられますが，トヨタ財団では昭和57年度の東南アジア諸語辞書編纂出版助成により出版に向けての最終段階でお手伝いをさせていただいています。

第1回全米環境教育会議に参加して

岐阜県博物館学芸部長　川崎立夫

去る8月中旬トヨタ財団の助成を得て，かねて招きを受けていた米国バーモント大学で開催された全米環境教育会議に出席する機会を得たのでその概要を報告する。なお，この会議でトヨタ財団の“身近な環境をみつめよう”研究コンクールに参加して研究費補助を受けた「岐阜県における哺乳類の生息状況とその環境調査及び環境教育にかゝわる研究」の成果のうち環境教育にかゝわる部分について発表した。

コングレスの概要

当National Congress for Environmental Education Futureは米国東北部の片田舎町バーリントンに於いて昭和58年8月12日より17日まで開かれた。参加者は主として米国内からであったが，ヨーロッパ，アフリカ，中近東等からも来ており400名ほどであった。職業は大学の生態学，環境科学関係者が多いようであったが，農事試験場，地質研究所，博物館，自然公園のレインジャー，それに小・中・高校の教員を含め多彩な顔ぶれであった。参加者全員が大学の寮に合宿し，朝7時から夜8時までセミナー，シンポジウム，レクチャー，実習とかなりハードなスケジュールで，自分の部屋（各一人）に帰ってからも，それぞれが翌日の準備のために夜遅くまで勉強していたり，ロビーで関係者の討議が行われていた。

全員集会は常に昼・夕の食事後にダイニングホールで開かれ，各界の権威者の講演及びその話題を中心とした質疑や意見の交換という方式で進められた。興味のあったものを2～3拾うと，国連環境プログラム局長の「80年代の環境教育」とかＡＢＣニュース記者の「今日の環境――記者の見通し」，土壌保全協会のDr. Peterの「生き残ることと育つこと――保全教育」といったものがあり，それぞれ白熱した意見の交換が行われた。

一方分科会は第2日目から第4日目の午前及び午後の大部分が当てられ，①市民組織，②初等・中等教育，③行政組織，④高等教育，⑤産業，等のインタレストグループに分かれて討議した。またこの時間には多くの実習も計画され，社会人や児童・生徒に実際に行う行動演習まで課したグループも見られた。おもしろそうな例を上げると，「円卓を囲んでの環境問題討議」，「人口と環境」，「運動場をフィールドとした10分間環境教育」，「地図（植生図，産業地図etc）の作り方を通しての環境教育のあり方」，「自然を詩的にとらえた環境教育」「マイクロコンピューターを使ってのエネルギー教育」「原子力利用と環境教育」，「人類居住地の研究」等々わが国では考えられない斬新な発想での演習がかなりあった。

我々の発表

この会議に出されたわが国からのテーマは我々のものだけで，3日目8月14日の午後の「高等教育」のセッションで発表を行った。テーマは“A Study on Environmental Education with the Aid of Mammal's Life”であるが，内容は中等教育に焦点を当てたものであり，高等教育部門で発表することに抵抗を感じたが，筆者を招いてくれたプログラム委員長であるDr. Paulkの指示でそうせざるを得なかった。しかし筆者の拙い英語での発表にかゝわらず質問が集中し，日本の環境教育の現状についてまで説明することになって予定の時間をはるかに越える活気のあるものとなった。哺乳動物を用いるという発想は他にはなく，それだけに食後の休み時間にも筆者に議論をもちかける人が多かった。

当会議の中間に夕方から夜中までバーモント大学に近い牧場で全員が参加してアルコール飲料を酌み交し，昼間の難しい話から離れて，肩を組みながら大合唱してフォークダンスを踊ったり，クイズをして無心なひとときを過ごしたのは印象的であった。最終日1日かけて分科会報告や「まとめ」及び決議をして会を閉じた。翌日より会で計画されたカナダ・ケベック州へのエクスカーションに参加し，有意義な日程を送ることができた。

最終まとめ会の風景

精神障害を越えて美術展に入選

社会福祉法人松花苑理事長
金築健夫

絵画製作を精神薄弱者療育に

松花苑は，精神薄弱者更生施設みずのき寮（昭和34年創設，定員90名）と，同授産施設かしのき寮（昭和41年創設，定員45名）を設置経営する社会福祉法人である。

本苑では，昭和39年より絵画制作を療育活動の一翼にとりいれ今日に至っている。京都絵画専門学校（現京都芸大）の教鞭をとられたこともある西垣籌一先生が指導して下さる幸運にめぐまれてこのことが実現したのである。

しかし，その頃の社会福祉施設では，絵を描くべき教室さえなく，画材としては，画用紙とクレパスを用意するのが精一杯であった。

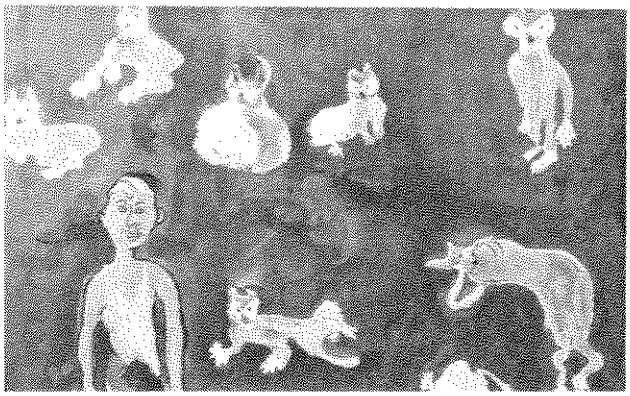
そんな状態で一年程たった頃，先生からこの人たちの絵は非常に面白い。色彩構成が特に抜群であると聞かされた。高校生の展示会に出品し，金賞を射止めたこともあった。クレパスと画用紙だけの絵画制作はその後十数年間続くこととなる。

油絵への挑戦

五年程前のある日，先生から，「これまで15年間，この人たちに絵を教えて来たが，色彩の感覚が指導を続ける程洗練されてくるようだ。クレパスと画用紙だけでもすばらしい絵ができているので，ここで思い切って油絵の制作をはじめたい。」という申出を受けた。15年間も，殆んどみじめといってよい程の条件の下で，黙々と指導を続けて下さった先生の言い分に，私たちはとぼしい財源をやりくりして100万円を予算計上した。

ところが，わが画家たちは，チューブを直接カンバスに押しつけて絵具を絞り出し，パレットナイフで塗りまくるのである。チューブは瞬く間に空となり，カンバスはあっという間に塗りつぶされる。パレットの上で絵具をとかし，絵筆で画くという上品な芸当ができなかったのである。これには，正直閉口した。

行動美術展に入選した小笹氏の「猫と犬と私」（部分）



しかし，続けているうちに，徐々に絵筆も使えるようになり，最初の荒っぽいタッチも次第に細やかなものとなって来た。何とかしてこれを続けねばならぬと思うのだが，問題は財源である。考えあぐねた末，トヨタ財団の助成をお願いしてみようということになった。

「重度精神薄弱者の美術教育可能性の追究と絵画制作に関する研究」というのが，助成申請のタイトルであった。これが受けいれられて，昭和55・56の二年度にわたって財政援助を得たわけである。そのおかげで思い切って画材を与えることができた。

美術展に入選

結果は見事であった。十数年間の蓄積が一時に噴出するが如く，すばらしい作品が輩出した。いろいろな展覧会に出品しては好評を得たのである。今年5月には新人画家の登龍門として権威ある京都市美術展に挑戦したところ一人が入選した。勢いを得て9月には行動美術展に出品したら，今度は二人が入選を果した。

入選したのは，みずのき寮の小笹逸男君(59)〈写真右〉と，かしのき寮の岩本勇君(31)〈写真左〉である。小笹君は動物好きの心根優しい人柄である。とりわけ猫を愛し，この所猫の絵に没頭している。自分の画いた猫を叱りつけながら絵を画くユーモラスな一面をもっている。岩本君は，ロマンの心情に満ちた青年である。景色や風物を眺めていると物語が生まれてくるが，それを絵にするのである。入選作のテーマ「ふくろうの森の物語」も，彼自らが考えてつけたものである。

私たちが目指すところは，彼等が絵を描くことで自立の道を拓くことである。今後，大々的な展覧会や画集の出版を通じてその可能性を探し求めたいと思っている。

助成刊行物紹介（隣人をよく知ろう プログラム）

生れ変わるシンガポール文学

華僑からシンガポーリアンへ

近年，驚異的な経済成長を遂げ，東南アジアの交通と貿易の一大中心地として，清潔で効率的な都市国家として，日本や韓国とは一味違った近代化を強力に推し進めているシンガポールから，３冊の短編集が「隣人をよく知ろう」プログラムの助成を受けて翻訳・出版されました。『シンガポール短編集１，２』全２冊（ロバート・イョオ編，幸節みゆき訳，幻想社）と，『シンガポール華文小説選(上)』（陳 徳俊（タン・チュクホック）編，福永平和・陳 俊勲（チェン・チュンシュン）訳，井村文化事業社）です。前者は英語，後者は中国語で書かれた短編集です。

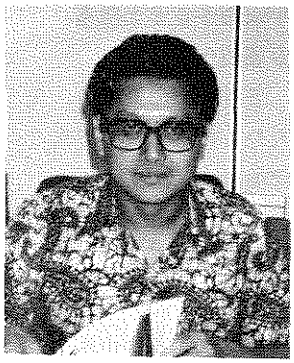
イギリス植民地時代のマラヤには多くの中国人・インド人（主にタミール人）労働者が流入したことにより，独立後のマレーシアとシンガポールでは先住のマレー人とあわせて，母語と伝統を異にする３つの民族からなる社会が形づくられました。特にシンガポールは中国系住民が７割以上を占めるため，1965年にマレーシア連邦から分離して今日に至っています。このような歴史背景は，この地の文学の状況を複雑なものにしています。各民族が，マレー語，中国語，タミール語の文学を育むと同時に，植民地時代の遺産ではあっても民族的に中立な英語が国民のコミュニケーションの手段として用いられたため，英語で教育を受けたエリートを中心に英語文学が現われてきました。

ロバート・イョオ　1940年シンガポール生れ。シンガポール大学で英語を学んだ後，66－68年英国留学。帰国後は政府発行の青少年向雑誌の編集長，バンコクで国際機関の広報担当官等を勤める傍ら，戯曲・詩集を発表。73年から教員大学の英語教官。

『シンガポール短編集』の編者ロバート・イョオは，インタヴューに答えて次のように述べています。「シンガポールの英語文学はごく若い文学です。優れた英語作家は10人程で，最年長のエドウィン・タンブーでさえ50才の若さです。本格的な長編小説はまだ現われていません。優れた作品は詩と短編の中に少しづつ出てきているというのが実情です。しかも，短編は雑誌に単発的に掲載されるため人々に知られないまま埋もれてしまいます。この短編集を作った目的もそこにあります。シンガポールにもこんな文学が生れているのだということをシンガポールの人々に知らせ，また，恵まれない環境で作品を書いている作家の励ましにしようと思ったわけです。」

この点について訳者はあとがきの中で，「アメリカでさえ，『アメリカ文学』と呼べるものが形をとるまでに２世紀を要したことを考えれば」，シンガポールの英語文学についても，「遥かな未来に希望を託して，気長に，その成長を見守ってゆくほかはない」と書いています。

『シンガポール華文小説選』に取り上げられた中国語文学は，中国本土から英領下のマラヤに流れて来た文学者を中心に始まり，これが中国本土の政治状況や文学運動の強い影響を受けつつも，大戦中の抗日闘争，戦後の反英運動などの荒波を乗り越えて，本土の中国文学とは一線を画した独自の文学に成長したと言われています。



陳　徳俊　ジャーナリスト養成専門学校卒業後，７年間政治部記者。その後，教育省の教育・出版局の編集長，南洋商報の広告マネイジャーを勤め，現在は南洋／星洲联合早報／晩報の販売マネイジャー。この間，金声教育センター代表等も勤める。

編者の陳徳俊はこう述べています。「65年の分離独立を契機に，人々がもはや中国人ではなくシンガポール人なのだという自己認識を懐くようになり，それによって小説の内容がこの前後で大きく変化しました。シンガポールの華文文学は，高い文章技術と南洋の彩り鮮やかな風物を描写した豊かな内容で台湾や中国本土でも評価されつつあります。しかし，国の言語政策が全体としては英語中心の方向に移っているので，今後は若い世代の中国語の水準が低下することが心配されています。」

この３冊を読み比べると，出稼ぎの華橋から，他民族をも含めた新生シンガポール国民へと身を翻していく人々の姿が朧気ながらも伝わってくるような気がします。

助成対象者インタビュー

アタン教授に日本の印象を聞く

去る10月24日，トヨタ財団の助成対象者であるマレーシア農業大学のアタン・ビン・ロン教授が来日し，10日間にわたり，学校や図書館など日本の教育事情を視察されました。途中，財団にもお立ち寄りいただいたので日本の印象など伺ってみました。

○読書習慣について

――アタンさんは，マレーシア人の読書習慣について調査なさっていますが，日本の読書事情についてなにかお気付きの点がありましたか――

日本で見た新聞に，最近の若者の活字離れの記事が出ていましたが，このへんはマレーシアと同じようです。その新聞には，時間的に読書の余裕がないことが理由として上げられていましたが，私たちの調査でも同じ意見が多くありました。しかし，私たちの調査対象のうち35％の人が余暇にはテレビを見て過ごすと答えているのですから，テレビを見る時間はあっても読書の時間はないということなのでしょうか。

日本の書店も何軒か見ましたが，本の価格，特に洋書がマレーシアに比べてずいぶん高いように思いました。アメリカの本を一冊6000円で買ったのですが，同じものがマレーシアなら4900円ぐらいで買えるのではないでしょうか。もっともマレーシアでは，大人向けの本には政府から出版のための補助金が出るので，それで価格が下がっていることもあります。

――マレーシアで読書習慣を定着させるには何が必要だとお考えですか――

まず学校で，読書の技術をしっかり教えることです。次に本が容易に手に入ること。それから本の内容が読者のニーズに合っているということです。また，出版社があまり利益のことばかりにとらわれずに出版する姿勢も必要でしょう。この点，昨日見てきた教科書センターのように，日本では教科書の出版会社が研究センターを作って，教科書や図書教材の質の向上に努めていることなどは評価されます。

○教育について

――横浜や東京の小・中・高等学校をそれぞれ1日がかりで見学なさったそうですが，生徒の印象などマレーシアと比べていかがでしたか――

小学校では，給食の内容などに豊かさが感じられました。子供は，よく勉強していますし，また知らない人に対してもものおじせず握手を求めてきたりするなど非常にオープンな感じでした。中学校では生徒会の選挙とかで，授業は見ることができなかったのですが，小・中学校とも，生徒数がマレーシアに比べて少く，学校運営もやりやすいだろうと思いました。マレーシアでは，都市部ではほとんどの学校が，生徒数が多すぎるため2交代制をとり入れています。日本の高校では課外活動が非常に活発に行われていましたが，マレーシアのように2交代制がとられていると，生徒の課外活動時間と授業時間とが分断されて，大変なロスになります。改善が望まれるのですが，なかなか困難なようです。

――日本では校内暴力とか学校の荒廃とかいうことが問題になっているのはご存知ですか――

ええ。今回私が見学した小・中・高等学校ではそういう問題はなかったようです。これはむしろ優秀な方のケースであるということもわかっています。日本では戦後アメリカの教育制度が導入され，以後30年の教育の中では精神的な面がまったく軽視されてきたと聞いています。今の教育の荒廃はその結果と考えられるでしょう。だから1977年だったと思いますが，カリキュラム改革で道徳教育が重視されるようになったのはよいことだと思います。しかしまた，精神主義にのみ凝り固まった教育は国にとって望ましいものではありません。要は物質的豊かさと精神的豊かさの間で，バランスをとっていくことだと思います。

（文責　久須美）

Prof. Atan bin Long

マレーシア。1935年生
現在マレーシア農業大学教育学部教授。専門は教育心理学。1980年、81年トヨタ財団国際部門助成を受け、マレーシア国立5大学の共同研究のチームリーダーとして、「マレーシア人の読書習慣と関心に関する研究」を実施し、このほど最終レポートをまとめた。

最近の研究報告書から

当財団の助成成果にもとづく研究報告書で，最近出たものを下記にご紹介します。いずれも「成果発表助成」により印刷物となったものです。ご希望の方は，それぞれの送料分の切手を同封の上，財団レポート係にお申し込み下さい。申し込み多数の場合は先着順となりますのでご了承下さい。

C－002　房総半島の孤島性とその文化の研究（鈴木晃他，B－5　140頁　和文）

第1回研究コンクールで研究奨励賞を受賞した「房総半島の孤島性研究会」の報告書である。この研究は，様々な指標を通して房総半島の自然・社会・文化の全体像をとらえようとしたもので，本報告書では各種生物群の分布と変動，民家の類型とその分布，海女の生活，子供の遊びと方言，地域環境の現状などが多数の図表によりとりまとめられている。（送料250円）

C－004　福岡市と八代市近郊の農・山・漁村および都市住民の生活環境・生活形態と健康度に関する比較研究（今野道勝他，B-5 104頁和文）

第1回研究コンクールで研究奨励賞を受賞した「(九州)健康科学研究会」の報告書である。この研究では，いわゆる半健康人の増加や退行性疾患の増加という今日的な健康問題に対して有効な対策を考える上での基礎データの収集をねらいとした。九州内の都市・農・山・漁村の4ヶ所において広域的住民健診を行ったが，本報告書はこのデータに基づく多数の論文のオムニバス形式となっている。（送料200円）

II－014　アイヌの疾病とその治療法に関する研究（木下良裕他　B－5　152頁　和文）

昭和53・4年度の助成とそれにひき続く自主的な調査に基づき，アイヌの古老 130名を対象に疾病と治療法に関する聴き取り調査を行った結果をまとめたものである。アイヌの人たちの疾病に対する考え方，疾病予防および健康防衛の方法，外療的療法，内療的療法等について克明に報告している。また，これと関連し，これまで行われてきた調査報告についても検討を加えている。(送料250円)

IV－005　水防都市構想――真間川流域の治水と街づくりの提案――（真間川流域研究会　A－4　224頁　和文）

昭和55年度から3年間にわたって地元住民を中心にして行われた調査結果の報告である。中小都市河川の改修問題にからみ，いかにして環境的な質を保ちながら水害に対して安全な街を作っていくかについて検討し提案を行っている。昭和56年度の台風24号による水害直後の実態調査や水防都市モデル住宅の建設など，地元の利を生かして行った実践的研究活動の記録としても貴重なものであろう。（送料300円）

なお，これらの研究報告書の他，当財団の助成成果を中心としたものとして本年11月以降下記のものが出版されております。書店にてお求め下さい。

「日系女性立川サエの生活史」　中野卓編著　御茶の水書房刊　2500円

「遊牧の世界（上)(下）」　松原正毅著　中央公論社刊（中公新書）　各420円

「水俣の啓示（上)(下）」　色川大吉編　筑摩書房刊　各3000円

「地域自治の改革構想」　菅原良長著　新紀元社刊　9700円

「環境汚染へのとりくみ」　山懸登他編　恒星社厚生閣刊　3500円

「祭の文化」　松平誠著　有斐閣刊（有斐閣選書）　1500円

「蛾類生態便覧」宮田彬著　昭和堂印刷出版事業部刊　25000円（上・下1セット）

編集後記

▶本号では岐阜県博物館の川崎立夫先生と，社会福祉法人松花苑の金築健夫先生にそれぞれご寄稿いただきました。両先生とも，ご多忙の中，ありがとうございました。

▶P5でご紹介した小笹さんの別の作品を財団でお借りしてロビーに飾らせていただいています。猫の表情が楽しくて見あきない作品です。

トヨタ財団レポート　No.25
発行日　昭和58年12月15日
発行所　財団法人　トヨタ財団
発行人　山口日出夫
編集人　久須美雅昭
印　刷　真友工芸株式会社
このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。